

【月刊】キリスト教書評誌

# 本のひろば

September 9  
2021

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可  
2021年9月1日発行(毎月一回発行)第765号

● 出会い・本・人

「試験問題」から生涯の愛読書へ 前川 裕

● 特集「原発問題」を学ぶなら

この三冊！ 久保文彦

● 本・批評と紹介

P・リクルール、A・ラコック 著／久米 博、日高貴士 耶訳

聖書を考える 大貫 隆

朴 憲郁 著 「増補改訂版」パウロの生涯と神学 廣石 望

山崎龍一 著 教会実務を神学する 古賀 博

越川弘英 著 キリスト教史の学び(下) 村上みか

菊地 順 著 M・L・キングと共働人格主義 松本敏之

黒川知文 著 マックス・ヴェーバーの生涯と学問 千葉 眞

坂本雄三 著 実践 教会役員 清重尚弘

牧ノ原やまばと学園50年誌編纂委員会 編著

それでも一緒に歩いていく 阿部志郎

崔 炳一 著 キリスト教ビギナーズ 村瀬義史

木下裕也 著 岡田稔の神学 松田真一

富坂キリスト教センター 編 100年前のパンデミック 山口陽一

近刊情報

書店案内

「本のひろば」バックナンバー表

我が国籍は天に在り  
志の信仰に生きる



船戸良隆

# 我が国籍は 天に在り 志の信仰に生きる

船戸良隆 ◆四六判 並製・152頁・定価1,540円

長年にわたって海外支援団体でアジアの貧困に取り組み、退職後は地方教会の牧会に携わる著者。その活動をつらぬくのは、神の国の福音に根ざした「我が国籍は天に在り」の信仰である。幾度も悔い改めに導かれ、十字架理解を深める著者の、渾身の説教集。

2021年8月23日刊行予定

推薦の  
ことば

近藤勝彦 東京神学大学元学長、理事長

この伝道者がなぜ人生のほとんど大部分の時間と勢力をアジアの発展途上国の子どもたちのために注いだのか。NPOの社会活動のリーダーがなぜ年齢を越えて伝道者として奉仕し続けているのか。すべての理由は、船戸良隆を撃ち、そして彼を生かしている福音にあります。それゆえ、主の十字架を仰ぎ、自分の十字架を負って従う。この生き方が是非年代や地域を越えて伝わってほしい。そう願わずにはおれません。

## 日々のみことば 生きる力を得るために

服部 修

2021年8月25日刊行予定

岡山・蕃山町教会の牧師である著者が、フェイスブックで10年近く配信してきた日々の聖句と養いのショートメッセージから、366日分を精選して収録。その日選ばれた聖書の言葉と1分程度で読める短いメッセージが、1年を通して生きる力を与える。

◆四六判 並製・200頁・定価2,420円

日々のみことば<sup>366</sup>

生きる力を得るために

服部 修



日本キリスト教団出版局

「試験問題」から生涯の愛読書へ

人 本



前川 裕

私が本と出会うきっかけには、「試験問題」がしばしばあったことを思い起こす。テストなどの課題で出題される文章に興味を持ち、当該作品や著者の他の本を探してみる、という例である。いま記憶に残っているものでは、中江兆民『三酔人経綸問答』、なだいなだ『人間、この非人間的なもの』などが挙げられる。「面白いことを言っているな」と感じてそれらの本を読み、さらには同著者の別の本にも手を広げていた。

また教科書に掲載された文章から影響を受けた、という人は比較的多いのではなからうか。私の場合は、中学生の時に使っていた英語の教科書に掲載されていたオー・ヘンリーの「二十年後」であった。これにとっても惹かれたことを覚えている。それから遠くない時期に、テレビの英語講座で同著者の「警官と賛美歌」に触れた。中学生向けのリライト版であったが、そのユーモアとウィットに感銘を受けた。今でもオー・ヘンリーの邦訳はおそらく全て所有しているし、英語版全集（日本で出版

されている！）も持っている。自分の人間観に大きな影響を与えた著者であることには間違いない。

これらの例は、問題文の選択の重要性を語っているのかもしれない。テストのために使った文章が、学生・生徒に大きな影響を与えることもある。教育の一端に携わる者として、畏怖を覚えざるを得ない。自分の選んだ文書が、相手の生き方を決めることもあるというのであるから。

新約聖書学者の大貫隆氏に、『隙間だらけの聖書』（教文館）という奨励・講演集がある。聖書には「隙間」がたくさんあり、それを埋めるのは「想像力」と「愛」だと大貫氏は語っている。その「想像力」と「愛」を育むのが、聖書以外のさまざまな本なのだと私は思う。どのような本を著し、また紹介していくのか。その重みと喜びとを感じつつ、新たな本との出会いを求めていきたい。

（まえかわ・ゆたかⅡ関西学院大学理学部教員・宗教主事）



## 「原発問題」を学ぶなら

# ▼この三冊！

## 久保文彦

(くぼ・ふみひこ) 上智大学神学部講師

福島原発事故後、原発の是非に関する書物が数多く刊行された。以下では、キリスト教的な視点から脱原発の必要性を考察した三冊を紹介する。

ローベルト・シュペーマン『原子力時代の驕り「後は野となれ山となれでメルトダウン」』

ドイツは日本の原発事故に最も敏感に反応した国である。事故が報じられると、メルケル首相は既定の脱原発政策を加速させる意向を表明し、連邦議

会は二〇二二年までの国内全原発の段階的廃止を決議した。

ドイツが原発廃止を迅速に決断できたのは、一九七〇年代からの反原発運動の成果が社会に蓄積されていたからである。環境保護の市民運動が高まる中、エコロジーと原発廃止を掲げて結成された「緑の党」は、国政に影響力をもつ政党に育った。チェルノブイリ原発事故後、国土の放射能汚染を被ったドイツでは、原発廃止を求める世論に応じた政府が再生可能エネルギーの

普及策を打ち出していた。二〇一一年時点で脱原発とエネルギー転換はドイツ社会の合意事項だった。

ローベルト・シュペーマンは、ドイツのカトリック哲学者(一九二七―二〇一八年)。人類が原発の利用を開始した一九五〇年代から原発に反対し続け、ドイツを代表する脱原発派の知識人として知られていた。本書には過去三回繰り返し返された原発巨大事故(スリーマイル島、チェルノブイリ、福島)を背景に公表された論文とインタビュー記事が収録されている。

シュペーマンの原発批判の核心は、『Nach uns die Kernschmelze』(メルトダウンは我らの後に来たれ)という原著タイトルに表現されている。原発はメルトダウン事故により放射性物質を大量放出するリスクを伴う。しかも事故の発生確率は安全対策を重ねてもゼロにはならない。四〇年の運転期間

中に巨大事故を起こさなくても、原発は稼働を続ける限り、最終処分が困難な放射性廃棄物(核のごみ)を大量に作り出す。

今日のキリスト教は、私たち人間には生態系と未来世代の生命を守る責任があることを強調する。許容できないリスクを伴う原発の利用は、この倫理的責任の放棄にはかならない。シュペーマンは、二〇世紀における科学技術の進歩に魅了され、原子力を制御できると自らの能力を過信した人間の驕りを批判し、脱原発は今後の社会にとって必然の選択であると主張する。

福島原発事故直後に刊行された本書は読書界の注目を集め、ドイツでは学術書部門のベストセラーとなった。

内藤新吾『キリスト者として「原発」をどう考えるか』

福島原発事故以前、日本では原発廃

止を求める市民は社会の少数派だった。政府と電力会社が、安全対策が万全な日本の原発は米国やソ連で起きたような巨大事故を起こすことはないと言っていたからである。原発問題を考えるのは原子力やエネルギー政策の専門家の仕事であり、この問題の素人である一般市民は専門家の判断に従えばよいという風潮も強かった。

福島原発事故の教訓の一つは、「原発安全神話」を流布させた政府・電力会社・原子力の専門家に、原発の是非に関する最終判断をまかせてはならぬということである。後日の報道によると、複数の原子炉がメルトダウンする前例のない巨大事故への対応を指揮した吉田昌郎・福島第一原発所長は、東日本が壊滅する最悪シナリオの進展を覚悟したという。社会の存続を不可能にする巨大事故リスクを伴う以上、原発の利用は電力不足の解消というエネ

ルギー政策の次元だけでは語れない。それは人間の生き方の善悪という問題に直結している。原発の電気で生活する一般市民こそが、その利用の是非については思考停止に陥ることなく、自ら判断する責任を負っている。

内藤新吾は一九六一年生まれ、日本福音ルーテル教会牧師。初任地の教会で原発での被ばく労働を繰り返した野宿者に出会ってから、今日まで約三〇年にわたり原発問題に取り組んでいる。本書は、原子力の素人である一般市民に、原発が引き起こす諸問題を解説する。内藤が指摘する原発の最大の問題は、それを利用する人間の生活が、地上における正義と平和の実現を―すなわちイスラエル預言者やイエスが追求した人類共通の望みを―裏切ってしまうことにある。

原発を利用する人間は必ず被ばくする。その危険の配分は平等ではない。

より大きな危険にさらされるのは原発労働者や原発立地地域の住民である。原発は人間の命の価値を序列化し、弱い立場に置かれた人々を犠牲にする差別的な社会を作り出してしまふ。

元来、原子炉とは発電ではなく、原爆ブルトニウムの生産のために開発された軍事技術である。安全対策や廃炉の費用まで計算に入れるなら高コストで、巨大事故リスクを伴う原発に、なぜ日本の政治指導者が固執するののか。その真の動機は核兵器製造に必要な技術の保全にあると内藤は分析する。

本書は、脱原発運動に関わった著者の経験に基づき、原発問題の構図を分かりやすく解説する。教会での学習会の参考書に勧めたい。

日本カトリック司教協議会『今こそ原発の廃止を』編集委員会『今こそ原発の廃止を』日本のカトリック教会の問

### いかけ

核兵器廃絶を訴える戦後日本の平和運動は、原発という原子力の「平和利用」については反対の立場と容認の立場に分かれていた。評者が属する日本のカトリック教会では、バチカンが国際原子力機関（IAEA）の加盟国として平和利用推進の立場を選択していることも影響してか、福島原発事故以前に原発廃止を訴える信徒は少数派に留まっていた。ところが、福島原発事故では、二〇一一年八月までに広島原爆一六八発相当の放射性セシウムが放出された。人間の被ばくと自然環境の放射能汚染という核害の深刻さにおいて、原子力の軍事利用（核兵器）と平和利用（原発）に何ら変わりがないことが明白になった。

この認識に基づき、日本のキリスト教各派は、福島原発事故後に原発廃止を求めるメッセージを発信した。カト

の観点から考察し、原発なき社会の実現にとって必要不可欠なエネルギー転換の可能性について検討する。

本書を準備中の二〇一五年、エコロジーを主題とする教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ』が發布された。回勅は、生態系破壊と貧困格差の拡大

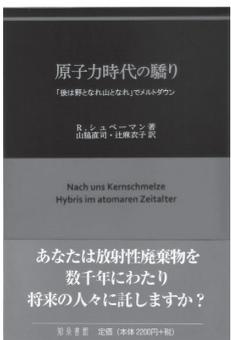
によって社会存続の危機をまねいた私たち人間の生き方を批判し、地球という共通の家を大切にする生き方への転換（エコロジカルな回心）を呼びかける。回勅の問題提起を引き継ぐ本書は、原発廃止がエコロジカルな回心の必須条件であると主張する。

リック教会は司教団が「今すぐ原発の廃止を」を公表し（二〇一一年二月）、原発廃止を明言できずにいた過去の立場を自己批判し、脱原発とエネルギー転換の呼びかけを行った。

二〇一六年刊行の本書は、この司教団メッセージの解説書である。全三章からなり、評者を含む九名の学者が執筆を分担した。

第一章は、核兵器開発から現在まで原子力技術がもたらした核害の歴史をふりかえる。福島原発事故については事故の経緯と被害の全体像を要約し、核害を受けた人間と地域社会の復興が今後どうあるべきかを論じる。第二章は、原子力と原発を科学的・技術的な観点から解説する。放射線被ばくが健康に与える影響や、原発施設の安全確保に関する技術上の難点については、専門家の知見を紹介する。第三章は、原発の問題点をキリスト教神学・倫理

本書は韓国語と英語に訳され、英語版はカトリック中央協議会のウェブサイトで公開されている。人類史の大事件である福島原発事故の教訓は広く共有され、語り継がねばならない。本書が脱原発を求める国際世論の形成に寄与することになれば幸いである。



『原子力時代の驕り』  
「後は野となれ山となれ」で  
マルチタウン  
ローベルト・シュペーマン：著  
山脇 直司、辻 麻衣子：訳  
知泉書館  
2012 年刊  
B6 判 124 頁  
2420 円



『キリスト者として  
“原発”をどう考えるか』  
内藤新吾：著  
いのちのことば社  
A5 判 83 頁  
2012 年刊  
880 円



『今こそ原発の廃止を』  
日本のカトリック教会の問いかけ  
日本カトリック司教協議会『今こそ  
原発の廃止を』編集委員会：編  
カトリック中央協議会  
A5 判 288 頁  
2016 年刊  
2530 円

影響史の視点に立った  
革新的な聖書理解

〈評者〉大貫 隆



聖書を考える

P・リクール、A・ラコック著  
久米 博、日高貴士訳



本書の原書は旧約聖書学者A・ラコックと哲学者P・リクールが一九九八年に、フランスと米国で同時に刊行した共著である。リクールは周知のとおり、二十世紀を代表する哲学者の一人である。ラコックはベルギー生まれの旧約聖書学者で、シカゴ大学でリクールと同僚であった。二人は旧約聖書から、創世記二―三章、出エジプト記二〇章13節、エゼキエル書三七章1―14節、詩編二二編、出エジプト記三章14節、雅歌の合計六つの本文を取り上げる。ラコックは積義的に最初のテキストの背景と意味を復元した後、新約聖書やラビのユダヤ教による再読解へつながりをつける。近代哲学・文芸批評（キエルケゴール、N・フライ、E・レヴィナスなど）への目配りにも長けている。それを受け取るリクールは、哲学史および現代思想におけるそれぞれのテキストの再解釈を省察している。二人に共通

するのは「影響史」の視点である。

「影響史」の視点にとつては、「読者」の問題がきわめて重要である。遠い過去に著された作品（テキスト）から「影響」を受けるのは、その後のそれぞれの時代の読者だからである。しかし、作品を生み出した著者自身も先立つ伝承を読んで、その影響を受けていた。その上で、自分の作品を読み、テキストの前にやってくる同時代の読者に影響を与えるべく、作戦を凝らしているわけである。テキストの伝承史はそのまま影響史なのであり、その全体を貫いて作品は新たに生まれ続けて行く。そうであれば、テキストを「後ろ向き」に分析することと「前向き」に分析することは相即不離の作業となる。この意味で、聖書の歴史的批判的研究を一括して否定的な意味で「後ろ向き」だとする紋切り型の論評は、ラコックも指摘（四頁）するとおり、当

たらない。ただし、これまでの研究が「読者」の読み行為ではなく、「著者」の作戦を中心にしてきたことは間違いない。

私に「読者」の重要性を最初に発見させてくれたのは、本書の訳者の久米博氏が一九七八年に編集・翻訳されたP・リクール『解釈の革新』（白水社）だった。その後、解釈学の分野でのリクールの一連の研究が久米博氏の手で次々と紹介されてきた。ここでは、「影響史」の視点だけではなく、テキストが「読者」のために現実を「模写」（メモリス）すると同時に「再創造（ポイエーシス）」する仕組みが分析される。これは比喩論と呼ばれ、いわゆる「言語学的転回」後の二十世紀の哲学にリクールが行った最大の

貢献だと言われる。私もイエスが「神の国」について織り上げていたイメージのネットワークを取り出す際に、それによって大いに啓発された。ただし、本書は「影響史」に関心を集中する分、この仕組みについての論述が相対的に希薄である。

欧米の聖書学は、私の見るところ、これまでリクールのその貢献に正当に反応してきたとは言えない。わが国の聖書学にとつても、久米博氏が全精力を注いでこられた労苦に積極的に応答して行くことが今後に残された課題だと思う。

（おおぬき・たかし 新約聖書学、東京大学名誉教授  
（A5判・五一四頁・定価五九四〇円・教文館）

ついに完結!



加藤常昭  
説教全集

全 37 巻

四六判・上製  
（オンデマンド版は並製）

第I期 福音書講解説教（全16巻）  
第II期 書簡・黙示録講解説教（全9巻）  
第III期 説教・講話（全5巻）  
第IV期 若い時と隠退後の説教とFEBCでの  
聖書講話（全7巻）

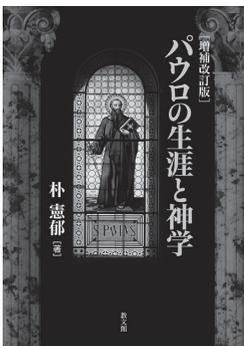
加藤常昭牧師が20年にわたって鎌倉雪ノ下教会で語った講解説教の集大成。2004年に刊行を始め、巻構成は、一つの巻にヨルダン社版と同じ区分の内容が入るよう配慮。また、字句・文章を見直し、新たに版を組み直した。ヨハネの手紙一および第III期・第IV期は新収録。

教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1  
☎03-3561-5549 FAX 03-5250-5107

## 伝道者として 神学者としてのパウロ

〔評者〕 廣石 望



〔増補改訂版〕  
パウロの生涯と神学  
朴 憲郁 著



本書は、東京神学大学名誉教授・特任教授、また山梨英和学院院长・同大学長である著者の同名著書（二〇〇三年）の増補改訂版である。前半が「パウロの生涯」そして後半が「パウロの神学」という構成は旧版のままである。「新たな神学的洞察は伝道を要請し、伝道はつねに新たな神学的営みを要求した」からである（「序」）。内容的には、後半に配置されたパウロの律法論が新しい。

前半「パウロの生涯」では、迫害者から回心をへて使徒会議に至る時期がとくに重点的に叙述される。他方で計三回に亘る伝道旅行は、第二のそれ以外はとくにとり上げられない。とりわけ第三回伝道旅行は、残されたパウロ真正書簡のほとんどがその時期に由来するので、ここでこそ伝道と神学の緊密な結びつきを探索できたのではなからうか。著者は、エルサレムでフアリサイ主義に加わった青年バ

ウロが、「十字架刑に処された神冒瀆者」イエスをメシアと告白するヘレニストたちを迫害したと推定するが（三七頁以下）、穏健なフアリサイ主義と暴力行使を正当化する過激思想は、それなりに区別されてよいだろう。また、パウロが「福音」概念の創始者であるという仮説に著者は好意的だが（四五頁）、果たして新約諸文書における広がりをもっと説明できるだろうか。さらに、シナゴーグ礼拝に参加する「神を畏れる者たち」が最初の異邦人の宣教対象であると同時に、そこにはユダヤ人もいたと著者は正しく指摘するが（六四頁以下）、最初の宣教地とされるナバテア人は「アブラハムの子孫」に当たり、本格的な異邦人伝道はむしろ「エルサレムから」（ローマ一五・一九）始まったかも知れない。故郷タルソスを宣教地に選んだ理由が、

外典創世記にいうアブラハムに約束された土地範囲に関係

するならば（七九―八〇頁）、「すべての異邦人」への伝道はなお段階的に発展した可能性があるだろう。ところで、バルナバやシラスとの協働が、エルサレムとアンティオキアの二教会間のみならず、「全キリスト教会に義務づけられていた」絆であったという推定には（八八頁以下他）、牧会者養成と教団指導に長年携わってきた著者の使命感のようなものが感じられた。

後半「パウロの神学」は人間論、キリスト論、福音論（義認、律法、信仰）、サクラメント論（聖霊論）、共同体論、倫理からなる堂々たる新約神学的な叙述である。目指されているのは、パウロの伝道実践を要請した神学的洞察の再構成である。しかし逆の視点、すなわちどのような伝道上

の課題がパウロに生じ、新しい神学的営みを要求したかは、伝統的に言われる律法主義と熱狂主義の二つのフロント以外には見えにくい。例えばエルサレムへの献金持参を目前に控えてコリントで執筆されたローマ書簡のパウロは、心は「西」に、しかし体は「東」に向いている。この引き裂かれたさまほどのような力学に由来し、それにパウロはどのような神学で答えたのか。

それでも本書の真骨頂は丹念な釈義、そして総合にある。じつさに聖書箇所を開きながら読むことで、読者は最良の仕方でパウロ神学への入門を果たすであろう。

（ひろいし・のぞむ 立教大学教授）  
（A5判・二八四頁・定価二七五〇円・教文館）

山谷の街・労働者の日  
食の奮闘・中、コロナ禍で、  
闘奮の牧師の続ける奉仕  
と読書礼拝の記録



## 剣を打ち直して鋤とする

菊地 謙

日本基督教団  
山谷兄弟の家伝道所牧師

高年齢化する山谷の地で、教会のかたわら低額弁当屋「まりや食堂」を長年運営する著者。コロナ下で元労働者たちの「食」を保障する奉仕に奮闘するまりや食堂の日々、伝道所の「読書礼拝」での黙想などを、「眼差し」というキーワードで語る。

四六判並製・232頁・定価2200円

日本キリスト教団出版局  
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457  
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp 《価格10%税込》  
<https://bp-uccj.jp>

# 牧師も教会員も知っておきたい 教會的な実務と運営の指南書

〈評者〉古賀 博



教会実務を神学する  
事務・管理・運営の手引き  
山崎龍一著



「困った！ 会計書類の見方がさっぱり分からない！」  
東京の教会で伝道師として奉仕した後、地方教会の主任牧師となったが、最初の頃、何とも冷や汗ものだったのが会計をはじめとした諸々の教会実務。

伝道師時代は、全てを主任と役員任せで、ボーッと役員会に参加し、専ら青年と関わるという実にお気楽な奉仕。ところが、主任として現場に立つやいなや、当然のことだが、毎日、実務の数々をこなさねばならなくなった。経験が乏しく、実務の内容もよく理解できていないことを痛感。まだ若かったこともあるので、「すみません、よく分かっていません」と役員たちに頭を下げて、一つひとつを教えてもらいながら最初の数年を過ごした。

今回、『教会実務を神学する——事務・管理・運営の手引き』という本が出るのと知り、若い頃、現場で苦境に立たつながら、異なる教えを見極める識別力を生み出していくかという教会実務の神学への試みです」とある。

一九歳時に初めて教会を訪ねて、その年に受洗した著者が、これまでの長い信仰生活を通じて、役員あるいはKGKや宣教団体で主事や理事としての経験を積み重ねる中で、時として問題と格闘しつつ培ってきた信仰そのものを実務に則して余すところなく証している。

本の最初に置かれている「推薦の言葉」に山口陽一氏が書いておいたように、本書のキーワードは「教會的に考える」と「せめぎ合い」の二つであろう。

実務を通じてさまざまな障壁に直面して「教會的に考え」、み言葉に立ち返り、祈りをもつての実践を追求してきた著者。その真摯な信仰に深く心を打たれると同時に、

されたあの日々をまざまざと思い起こした。

苦い経験を踏まえ、牧師に必要なのは、まずは諸事務の理解と遂行力。と心に刻み、後進にも語り継いできた。そんな私にとっては、願ったりかなったりの一冊。

著者・山崎龍一さんは、私が神学生だった頃、アルバイトスタッフとして働いたあるキリスト教団体の職員であった方。後に公益財団法人となったその団体で、現在は彼が監事、私が理事として共に運営に携わっている。これまで何かとお世話になってきた山崎さんが、教会実務について著されると知って歓喜。しかも単なる実用書ではなく、実務を「神学」している点が肝要。

まえがきに、「本書は……教会実務のノウハウや行政への申請手続きの手順書ではありません。教会実務においてどのような理解をもつことが教会の成熟かつ堅固な歩みに

改めて襟を正される想いを与えられた。

この世に立つ教会は、どうしてもキリスト教と世俗の論理の狭間に置かれ、両者の「せめぎ合い」を必然とされる。容易に世に飲み込まれることをよしとせず、あくまでも信仰に立ち返りながら格闘しようとしている著者。こうした姿勢にも大いに刺激を受けた。

役員たちと読み合わせ、学び、語り合いたい。また現場で苦勞した経験から、本書をテキストに神学校で実践的な実務への備えが行われ、実務と教会形成とを並び立てる神学教育が必要ではないかと思わされている。

（こが・ひろし）日本基督教団早稲田教会牧師  
（四六判・二二四頁・定価一九八〇円・教文館）



## 新刊 聖書学論集52

日本聖書学研究所編  
●A5判並製 124頁  
定価3,300円(税込)

### 降霊術師の「腹話術」

—サムエル記上28章の解釈  
史・受容史をめぐって—

高井啓介

### 初期キリスト教における死 後世界観と殉教者による 死者の救済

—ローマ期カルタゴでの  
事例を中心に—

大谷 哲

### ヨナ書における旧約聖書 からの引用句の使用法

—神と関わる句に  
着目して—

長井隆児

### 彼らは誰と挨拶するのか

—ローマ人への手紙16章の  
機能—

橘 耕太

### 「神の箱」マリア

—『ヤコブ原福音書』におけ  
るマリアと家、神殿、民—

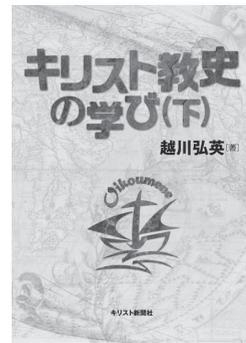
川越 菜都美

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402  
☎03-3238-7678 FAX03-3238-7638

# 語り伝える「キリスト教史」

〈評者〉村上みか



キリスト教史の学び(下)  
越川弘英著



かねてより著者の越川氏は、大学生にキリスト教史を教えるのに適切な教科書がないことを嘆かれ、これまでそのような入門書を企画されてきた(『一冊でわかるキリスト教史』日本キリスト教団出版局)。筆者もこの企画に関わらせていただいたが、しかし越川氏は満足されなかったようである。ついにご自身で執筆を試み、二部より成るキリスト教史の入門書が出版された。本書はその後半部にあたる。

本書の構成は大きく近世と近現代に分けられ、その中で各時代、各地域における神学や事象が論じられてゆく。構成上の特徴としては、伝統的な時代区分であった「宗教改革」に代わって「近世」が用いられ、また日本キリスト教史を別項目として扱わず、世界のキリスト教史の中に位置づけていることが挙げられる。新しい視点をもって歴史叙

述を試みようとする著者の意気込みが窺われる。

そのような著者の意欲的な取り組みは、本書全体を通じて感じられる。各時代の多岐にわたるテーマについて、多くの先行研究にあたり、詳細な説明がなされてゆく。多くの時間とエネルギーが費やされた労作である。細分化の進む今日の研究状況下で概説書を著すことが難しくなっている中、越川氏はそのことを知りつつ、しかし複数の著者による概説書が統一性を欠くことの問題性を強く意識し、ただ一人の力でキリスト教史を著すという果敢な行動に出られた。実際、読み進める中で、言葉の背後に著者の存在が感じられ、読者にキリスト教史の各事象の「特徴と課題」を示そうとする著者の思いが伝わってくる。

その一方で、一人で概説書を書くことの難しさも改めて認識させられた。参考文献に基づく叙述や引用が多くなさ

れることにより、多様な視点や議論が混在し、論旨がつかめず、何を伝えたいのかわかりにくいところが散見される。あるいは著者の問題意識や今日の問題を捉えて歴史的事象が説明されることもあり、著者のメッセージを感じる一方で、歴史叙述として違和感を覚えるものもある。また神学思想をもって歴史事象を説明しようとする傾向が見られ(例えば、ルター派、改革派の社会や宣教への関わり方(四一、二〇六―七頁)、実証性を前提とする今日の歴史叙述のあり方からすると、飛躍が感じられるところもある。さらに近年の研究の成果が十分に反映されておらず、より正確な理解が望まれるものもある(ルターと人文主義、二王国説、再洗礼派の洗礼論と教会論の関係、カルヴァンの

神の国建設など)。加えて、歴史的な「流れ」を伝えるという著者の意図を効果ならしめるためには、社会史や経済史の視点も取り入れ、歴史的な連関をより具体的に示すことができればよかつたと思う。

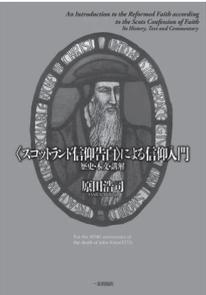
今日、歴史家は実証性、客観性の要請を前に、作品に「メッセージ性」をもたせることを躊躇する。しかしそれが、キリスト教史を伝える作業の中で意味をもつことを、本書は教えてくれた。その具体的な方法の検討は、今後の歴史神学の課題と言えるだろう。著者の問題提起とその労に感謝したい。

(むらかみ・みか 同志社大学神学部教授)  
(A5判・三四六頁・定価二四二〇円・キリスト新聞社)



**〈スコットランド信仰告白〉  
による信仰入門**  
歴史・本文・講解

**原田浩司**  
HARADA Koji



宗教改革の精神を  
次世代に繋ぐために！  
聖霊と改革者の熱い息吹  
が注がれた歴史的な信仰  
告白から教理の要点を学  
び、今日を生きる教会の  
確かな信仰の盾とする。

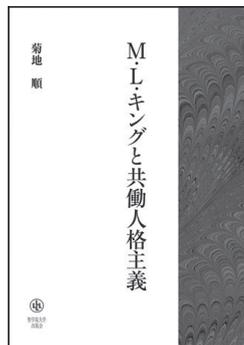
A5判  
定価 1,760 [本体 1,600 + 税] 円  
ISBN978-4-86325-133-5



株式会社 一麦出版社  
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10  
TEL (011) 578-5888  
<https://www.ichibaku.co.jp>  
携帯 [mobile.ichibaku.co.jp](https://mobile.ichibaku.co.jp)

# キングの思想を 組織神学的視点で明らかに！

〈評者〉松本敏之



M・L・キングと  
共働人格主義  
菊地 順著



本書は、すでに『テイリツヒと逆説的合一の系譜』（聖学院大学出版会、二〇一八年）を出版している著者の、渾身のM・L・キングの研究書である。著者によれば、前著はテイリツヒ神学を借りた、著者の「信仰の理論編」であったが、本書は著者の「信仰の実践編」であるという。

本書は、「キングの行動の背景となった、知的確信に支えられたキングの信仰を、組織神学的視点から明らかにしようとするものである」（二二頁）。全体は八章の本論と二章の補論から成り立っている。本論を中心に紹介したい。

「第一章 ダデイ・キングとその信仰」では、キングの思想的背景の出発点として、父親の信仰、特に「憎んではならない」があったことを述べる。

「第二章 キングの聖霊論と時代精神」では、キングは聖霊についてあまり語っていないが、キングの言う「時

代精神」（新たな時代を察知する力）こそ、「聖霊」に通じるものとして「聖霊論」を展開する。

「第三章 キングの神論と人格主義思想」は、主にキングの博士論文を扱う。一九九〇年、キングの博士論文に多くの剽窃が見つかり大問題となった。著者は、剽窃はあってはならないが、倫理的評価はキングの全生涯に対してなされなければならないとし、学問的にも、なお価値があるとする。特に、「神は善においては無限であるが、力においては有限である」という神概念と、「神は人間を通して、人間と共働する仕方、悪に対して戦う」という共働人格主義は、後の公民権運動の基礎ともなったと述べる。

「第四章 キングの人間論と人格」では、キングが人間をどのように理解していたかを問い、「神の像」として自由を持つ「人格」と人間（特に黒人）の尊厳について述べ

る。

「第五章 キングの神人共働論と『神の子』」では、キングの「神人共働論」が、救いの達成についてのいわゆる「神人協力説」とは違うことを明確にした上で、「人間には神の恩寵の下で歴史を変える力と責任があり、またその力もある」というキングの人間性への信頼と信仰的楽観主義を詳述し、それらが「非暴力直接大衆運動」を生み出したと述べる。

「第六章 キングのキリスト論と愛の概念」は、「聖霊論」「神論」に続く「キリスト論」を扱う。キングにおいては、キリストは端的に「愛」として理解され、最終的に目指された「愛の共同体」の内実でもあると言う。

「第七章 キングの非暴力論と人類の法」では、キング

が堅持した非暴力の思想を、キングの具体的な歩みに触れて検討し、その精神と歴史に働く救済の原理を探る。

「第八章 キングの見た夢——愛の共同体」は、いわば終末論である。キングの見た夢が、キリスト教を背景とし、アメリカの独立宣言と合衆国憲法に深く根ざす夢であったとし、それがキングの社会行動の力の源泉となったと述べる。この章には著者の信仰が最もよく表れていると思う。

本書は、筆者の知る限り、キングの思想を正面から組織神学的に論じた最初の日本語の書物である。その意味でも、キングの思想を神学的に整理し、理解しようとするすべての人たちにとって優れた指針となることは間違いない。

（まつもととしゆき 鹿兒島加治屋町教会牧師）

（A5判・四五二頁・定価六四九〇円・聖学院大学出版会）

## ヨベルの新刊案内

「ヨロッパ思想史」

金子晴男

注目の最新刊

# 東西の靈性思想 キリスト教徒と日本仏教との対話

西行や良寛を読むと心が澄み渡り、法然や親鸞に信心は鼓舞される。ルターと親鸞はなぜ、かくも似ているのか。キリスト者が禅に共感するのはなぜか。

多くのキリスト者を悩ませてきたこの難題に「靈性」といふ観点から相互理解と交流の可能性を探った渾身の書。

四六判上製・二七二頁・一九八〇円（本体一八〇〇円十税）

## キリスト教思想史の諸時代 全7巻別巻2

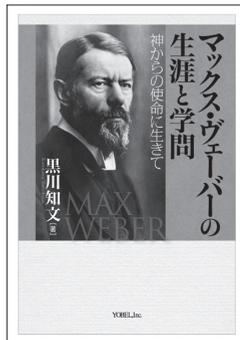
- I ヨロッパ精神の源流「既刊」
  - II アウグスティヌスの思想世界「既刊」
  - III ヨロッパ中世の思想家たち「最新刊」
  - IV エラスムスと教養世界「次回配本・編集途中」
  - V ルターの思索「第五回配本」
  - VI 宗教改革と近代思想
  - VII 現代思想との対話
- 別巻1 アウグスティヌスの靈性思想  
別巻2 アウグスティヌス「三位一体論」の研究

新書判・平均256頁  
各巻1,320円

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp  
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F  
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858  
出版の手引き / 呈 (税込)

# 右手に『聖書』、 左手には『プロ倫』

〈評者〉 千葉 眞



マックス・ヴェーバーの  
生涯と学問  
神からの使命に生きて  
黒川知文著



右のタイトルは本書の特質を示す帯の標題である。本書は、「学問は神からの使命である」と信じたひとりの研究者が、「恩師」マックス・ヴェーバーの生涯と思想に迫る刺激的な著作である。現在、中央学院大学教授の黒川知文氏は、宗教史研究者として、ロシア宗教史、西洋宗教史、ユダヤ人史、内村鑑三と無教会研究、賀川豊彦研究と幅広い専門分野をもつ研究者・教育者である。著者の学問研究の出発点は、ヴェーバーとの出会いであり、とくに東京外国語大学大学院時代に山之内靖教授の授業でヴェーバー著『プロ倫』（プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神）を読んだことであつたという。本書は興味深い独創的なヴェーバー研究である。それはそのまま、研究者と牧師を兼ねる著者のたいへん個人的な人間性・人生・学問をそのまま表している。そして本書は、通常想定される厳密

かつ難解なヴェーバー研究書のタイプとは一線を画し、著者の心情と個性が躍動する興味深い入門書にもなっている。本書は四つの章から構成されている。第二章「ヴェーバーとの出会い」は、小説の形式で「ヴェーバー研究の第一人者」の「山中靖先生」（山之内教授のこと）とヴェーバーとの出会いを興味深く描いている。第二章「ヴェーバーの生涯」は、父マックスと母ヘレーネの不和に起因する家族内の確執、ルター派教会での堅信礼、キリスト教信仰との葛藤、研究者としての出発と業績、神経症疾患と四年にわたる療養生活、治癒後の研究の再開と最盛期、アメリカ研究講演旅行、スペイン風邪による突如とした死の訪れなど、盛り沢山の内容になっている。そして「ヴェーバーの信仰」の問題を多角的に扱っている。「宗教的音痴」を自称したヴェーバーであつたが、黒川氏の最終的判断は次のよう

ある。「ヴェーバーは内面的には神の存在を信じており、『聖書主義的敬虔主義』『カルヴァン派』に近い信仰を持っていたことが考えられる」（一〇三―一〇四頁）。ヴェーバー研究では少数派の解釈だが、その立論は傾聴に値する。

第三章「ヴェーバーの学問」では、『プロ倫』についてはその鍵概念である「カリスマの日常化」や「理念型」など、丁寧な説明がなされている。また『プロ倫』に関する論争史も一部紹介され、その主たる反論も説明に付されている。『職業としての学問』と『職業としての政治』については、「職業」と訳されることの多いドイツ語の原語「Beruf」に関して、「神からの使命」と訳した方が適切であると指摘している（一五六頁）。短い終章「信仰と学問」は、黒川氏の見解を簡潔に示す章となっている。信仰と学

問とは矛盾せず、信仰に基づく学問の可能性を論じている。著者は、「キリスト教は学問に従事する熱心と喜びと希望とを豊かに与えてくれる」という矢内原忠雄の言葉を引用する（一八四頁）。そして学問を志すときに若い研究者たちに対して、多くの貴重な励ましと建徳的な助言——ヴェーバーと自分自身の研究体験から学んだもの——を投げかけている。学問は常に進歩していくので、「自分を知恵ある者と思うな」（箴言三章七節）を旨に、謙遜になつて研究に励むことが勧められている。読者を裨益して止まない啓発的なヴェーバー研究書である。

（ちば・しん 国際基督教大学名誉教授）  
（四六判・二九六頁・定価一九八〇円・ヨベル）

**ヨベルの新刊案内**

**人生の8つの鍵**  
ユダヤの知恵に聴く！

期待の刊行！

ハロルド・S・クシュナー 小西康夫訳

数千年にわたる苦難と流浪の中で編み出され、涵養されてきたユダヤ人の生きる叡智を、聖書タルムードをはじめ、古今東西の書物や人々の生き様を抱き込みながら縦横無尽に解き明かす。ハッシュェルを師とする現代アメリカのラビにして作家クシュナーによる珠玉の人生指南！

四六判・二二二頁・一七六〇円

**神の王国**  
近代以降の研究史

再版出来！

山口希生

19世紀以降一気に開花した「神の王国」に関する国内外の研究史や試論を広汎に取り上げ、イエスの福音宣教の中心的使命であった「神の王国」の本質を多角的なアプローチによって解明する。

四六判上製・二七二頁・一八七〇円

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp  
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F  
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858  
出版の手引き / 呈 (税込)

# 伝道刷新へ 「分断」を超えて多様性への道を

〈評者〉 清重尚弘



実践 教会役員  
マネジメントとリーダーシップ  
坂本雄三郎著



「これからの日本の教会の伝道」と題する講演で「伝道刷新」を語り、総花的伝道論ではなく、「急所を衝くこと」が必要と、神学者加藤常昭先生が語られたのは、二〇〇三年のことである。加えて、先生は、伝道評論ではなくて、極めて実地的な考察と提言によってのみ進展する、と喝破されている。

この度、一信徒の視点から、実体験に基づく伝道の実践分析と提言をまとめた書が世に出ることとなった。加藤先生の願った課題に対する一つの応答と言えようか。

著者は、大阪大学の工学部出身、最大手電機メーカーに就職、在職中に工学博士号を取得。定年後は、工場管理・改善のコンサルタントとして活躍。この間に転勤先の諸教会で役員として、延べ四十年ほど奉仕、その間に失敗も多かつたと述懐。起稿に着手して八年余、伝道覚醒、教会

成長を祈りつつ長年の思索をまとめたのが本書である。書名の示す通り、役員会の勉強会のテキストとして格好の書として推薦したい。

三部構成の第1部は、開拓期の南房教会の役員会の進展を追う。役員会運営に採用されたのが著者の推奨する「デルファイ法」。企業等で広く援用されており、集団の意思「収斂」に有効な方法である。意見の「相違は受け入れつつ」一致しうる道を目指すもの。教会のような集団の意思決定に有効な方法であることを、実践のなかで見出したと言える。詳細は六九頁以下に。ちなみに「デルファイ」の命名は、アポロン神殿の託宣で有名なギリシャ古代都市に由来する。

重要であろう。摩擦や分断を生まない訓練として、交流分析などの素養が有益との具体的な示唆も。また、新任時点からの心構え、日常の自己訓練へと向かうガイダンス教程とともに、古今のリーダーの名言金言を東西を問わず参考にする。

第3部 これからの日本伝道。著者が真情を吐露するこの第3部がこの書の圧巻である。

日本社会の構造変化は、人口減少、若者、高齢者、子供の貧困などが示すように、右下がり続きであり、これに並行するように、教勢も下降線をたどっている（一四二頁のグラフ）。加えて著者が注目するのは、プロテスタントのうち、教団以外は増加傾向が見られるのに、なんと、教団が停滞という事態である。これは、当事者としての心痛む問題なのである。

教団の伝道不振の原因は何か。さまざま議論があり、微妙な問題で、発言を躊躇うテーマと言えが、あえて著者はここに踏み込んでいる。加藤先生の言葉を借りれば、こここそが敢えて「急所を衝く」ところなのかもしれない。

著者は言う。不振の要因は、信仰告白の論議より、政治的な立場による「分断」によって信徒、若者を教会から遠

ざけることが、教会の成長を妨げる結果になっているのではないか（一四五頁以下）。四十年に近い「教会派」と「社会派」のせめぎ合いに起因する伝道低下であれば、「癒しの時」を超えて「伝道に燃える教会」へと「刷新」を目指したい、と述べる。

著者は言う。合同教会として出発した教団は、信仰告白に反しない範囲の多様性を許容しあって、一つとなつて、地域に根差す存在たるを得るのではないかと問いかけるのである。

「戦責告白」の受け止め方などについては、見解の分かれる難題、しかし避けては通れない。このような点も含めて、著者は教団の責任あるお立場の方々とも面談して教えを乞うた経緯がある。著者の真摯な態度の証しである。復活の主の命に従って網を引き上げると、一五三匹もの大漁、なのに「網は破れていなかった」とある。網が復元されるようにと、伝道刷新を切望してやまない一信徒が心血を注いだこの書が、教派を超えて広く読まれるように、お勧めしたい。

（きよしげ・なおひろ）九州ルーテル学院大学名誉学長  
（A5判・一九三頁・定価一七六〇円・リットン）

## 牧師の人生を、面白く、深く、易しく語る

〈評者〉阿部志郎



それでも  
一緒に歩いていく  
牧ノ原やまばと学園50年の歩み  
牧ノ原やまばと学園  
50年誌編纂委員会編著



静岡県牧之原にある牧ノ原やまばと学園の機関紙を編纂した50年誌が、一般の読者に向けて刊行された。学園の50年の歴史を綴ったものだが、同時に、東京大学哲学科から東京神学大学をへて牧師になり、静岡で牧会とともにやまばと学園という最重度の知的障がい児の施設を建設、運営に当たった長沢巖という男の生涯とその哲学をまとめたものだとも言える。圧巻なのは、長沢のキリスト者としての、逸れない生き方である。

ノーベル賞を受賞したインドの詩人タゴールは、「すべての子どもは、神が未だ人間に絶望していない証である」と言った。また、ドイツでは、てんかんをもつ子ども達のためのベートル（神の家）という施設がある。人々はそうした障がいを持つ子ども達を「ベートルの子（神の家の子）」と呼ぶ。

普通なら、正論を一席かませようと、相手に議論を吹きかけたくなるところだ。しかし、彼はひたすら静かにそこに座り続けた。

最後には、たまりかねた部長が「会ってやれ」と言いだし、事態が動き始める。長沢の無言の中にブレない姿勢に、役人が動かされ、やまばとの味方となっていく。そこに、静かな、しかし、逸れないキリスト者としての生き様がある。

この後、長沢は道半ばにして病に倒れる。学園を引き継いだのが妻の道子だ。日本の場合、キリスト者の多くは、教会を離れ、個人で福祉の事業を立ち上げていることもあり、創設者の強い個性とリーダーシップで運営されてきた施設は、リーダーを失うことで本来の招命から離れてしまうことがある。施設の規模が大きくなるにつれて、制度の上に住し、出発点から逸れてしまうことも珍しくはない。

長沢もまた、子どもの中に神を見、子ども達を深く愛した。やまばと学園が対象としたのは、社会における弱者である子どもの中でも、最も弱い、最重度の知的障がいを持った子ども達であったことは、特筆に値する。しかも、彼ら、社会における弱者を強者の側から守ろうとしたのではない。彼らと同じ地平に立ち、彼らと共に生きることを目指したのだ。仏教に信仰説法という言葉があるが、長沢の行動の一つ一つが、キリストへの愛を実践していたと言える。

彼の生き方を語る非常に印象的なエピソードが本書に出てくる。行政機関への陳情である。町役場で関係者に知的障がい者施設の建設の話をすると、「たわごとだ」と嘲笑された。県庁でも扱いは同様だった。「面会さえしてもらえない。それでも長沢は、同じ時間に窓口を訪れ、一時間ほど黙ってそこに座り、立ち去る。それを毎日続けたという。

しかし、道子は、最も弱い人達と「共に生きる」という長沢の理念を貫きつつ、学園の運営を続けた。そうしながらも、学園は規模を拡大し、成長を続けている。長沢亡き後のやまばと学園の動きを見ると、50年の長い歴史の中に長沢の魂が躍動し続けているのを感じる。

かつて、「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく」と言った作家がいたが、本書は、ヨーロッパのような教会というコミュニティ基盤を持たなかった日本の歴史の中で、教会を基礎に弱者と共に生きる共同体を作ろうと額に汗した、一人のキリスト者の生き様を、易しく、深く、面白く、語ってくれる。そして、読む者に静かにこう問いかけてくる。

さて、あなたはどうか。

（あべ・しろう）社会福祉法人横須賀基督社会館会長  
（A5判・二三八頁・定価二二〇〇円・ラゲーナ出版）

## キリスト教とは何かを 手軽に学べる入門書

〔評者〕 村瀬義史



キリスト教ビギナーズ  
キリスト教から生きる意味を学ぶ  
崔 炳一 著



本書は、活水女子大学で学内の礼拝／チャペルアワーとともに「キリスト教」を担当してこられた著者によるキリスト教の入門書である。

多くのキリスト教系大学では、「キリスト教」もしくはこれに類する建学の精神に関わる科目が必修になっている。この科目の担当者は、科目開講の目的を念頭に、限られた時間で、学生に何をどう伝えるべきかを日々問いながら授業の準備にあたっているであろう。そもそも「キリスト教とは何か」という問いに唯一の正解がないのだから——このことはキリスト教の前提であろう——講義で共有される事柄のフォーカスが、担当者自身の福音理解・キリスト教理解になることは避けがたい。だからこそ、少なからぬ数の学生にとってキリスト教について学ぶ最初で最後の機会になるかもしれないその科目を担当する者の責任

は重い。伝達内容の選択も重要だが、探求心を刺激し、キリスト教と向き合う「旅」を導くナビゲーターとしてのノウハウも必要とされる。

評者自身、キリスト教主義大学の学部チャプレンの一人として奮闘しているが、こういう仕事をする上で、同様の職にある方々が執筆されたキリスト教の入門書から大いに学ばせていただいている。このたび出版された本書も、背後にある長年の試行錯誤に敬意を覚えつつ拝読した。

本書は約百ページのコンパクトな書物である。内容は三部構成で、まず、第一部「キリスト教の基礎」として、礼拝とその構成要素である聖書、説教、主の祈り、使徒信条、教会暦など、伝統的にキリスト教会を形成してきた重要な項目が概論される。その後、第二部「旧約聖書から学ぶ」で天地創造から始まる原初史、族長物語、イスラエル史の

主要部分が紹介される。そのうえで、第三部「新約聖書から学ぶ」ではイエス・キリストの生涯と教え、また使徒たちの働きについて論じられている。第二、三部では人物に光が当てられている。また、関連の用語や芸術作品の紹介、聖書にまつわる美術作品が随所に挿入されており初学者が親しみやすいよう工夫されている。またところどころに、読者の思索を促すための設問が入れられている。

この分量でキリスト教のテキストを執筆しようと思うと、「キリスト教」がもつ多面的で膨大な情報から、かなりの量の「枝葉を落とす」作業が求められる。それは、何が「キリスト教」のエッセンスであると考えているか、また、著者自身の福音理解やキリスト教理解について表明する作業にもなる。そこでは、多かれ少なかれ著者の教派的・神学的な背景も反映される。本書では著者の基本姿勢が次のように言明されている。つまり、著者にとって「キリスト教が教えることは不変的な内容である。それは聖書が永遠に書き換えられないことと同じである」、また、「『キリスト教』とは人間の理性に基づいて、いわば『教会の外の世界』つまり私たちが『世俗』とよぶ人間社会においてキリスト教精神を広げる学問である」(二〇―二頁)。こ

こから推察されるように、本書は全体として、キリスト教

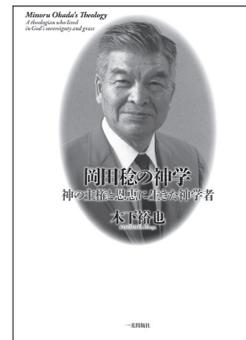
精神の源泉たる聖書の使信を読者に伝えようとするものである。神の愛と赦し、人間の罪と様々な囚われからの解放、内面的な悔い改め、使命に生きること、といったテーマが平易な言葉づかいによって叙述されており、キリスト教信仰において重要とされてきた事柄にあらためて気づかされる。本書は、大学の授業のテキストとしてだけでなく、どのプロテスト教会においても信仰生活の手引き書の一つとしても活用できるであろう。

ただ、教会や聖書の内部で共有されている信仰・思考についての叙述が中心になっているだけに、求道者ならまだしも、初学者が単独で読むには難解だと思われる部分があることも指摘しておきたい。たとえば、著者が力説するキリスト教の信仰と教えの「普遍性」が理解・了解されるためには、本書と読者との間に橋を架ける適切な解説が必要とされるであろう。その点では、信仰をめぐる対話や議論を促す情報源としても活かすことができよう。手軽に読める入門書であり同時に「キリスト教とは何か」という切実な問いをめぐる労作である本書が、広く読まれることを期待したい。

(むらせ・よしふみ 関西学院大学総合政策学部教員  
A5判・一〇四頁・定価九九〇円・一麦出版社)

## 改革派神学の伝統に立つ

〈評者〉松田真二



岡田稔の神学  
神の主権と恩恵に生きた神学者  
木下裕也

### 岡田稔の神学

神の主権と恩恵に生きた神学者

木下裕也著



本書の目的について著者は、「日本キリスト改革派教会はすでに70年をこえる歴史を刻み、創立80周年に向けて備えつつある。今この時、このきわだった先達の神学的業績から多くを学び取りたいと願うものである。岡田神学を学ぶことは、決してその地点にとどまることを意味しない。その内実をていねいに評価し検証する作業を重ねていくことは、神学的伝統の継承とともに改革派神学の新しい地平を開いていくことにも益するであろう」と述べている。その意味において、日本キリスト改革派教会だけでなく、改革派神学の伝統に立ち、学んでいる者にとって必読の著作である。

本書の構成は、第一章「改革派神学運動と岡田稔」、第二章「岡田稔の神学的立脚点」、第三章「岡田稔の神学理解」、第四章「岡田稔の教会理解」、第五章「旧日本基督教会の

伝統と岡田稔」、補論「米国南長老教会の神学と岡田稔」である。

第一章において、著者は改革派神学運動について論じ、その神学的基礎、土台について、カルヴァン主義、唯一の規範としての聖書と従属的規範としての信条、神の主権と救いの恩寵性、教会の自律性を岡田から読み取っている。第二章は、岡田の神学的立脚点について論じ、「福音の前提としての有神論の強調」「聖定の教理の尊重」「聖書の絶対的権威の承認」の三点を取り上げる。有神論的思惟とは、被造世界のあらゆる領域を神のまなざしのもとに置き、そのあらゆる場所で神の主権を承認することで、悪しき二元論を克服することができる。さらに聖定論とは、三位一体論的キリスト論に基づいて神と世界と人間との関係を明確にするあらゆる思考の出発点であり、神の主権性

と万物の統一性の原理であり、ペラギウス主義や新近代主義、あるいは汎神論や理神論を克服することができる。論じる。第三章は、岡田神学の精髓である『改革派教理学教本』を考察する。著者は、岡田が組織神学や教義学ではなく教理学とした意味について論じる。教理学とは、宣教に奉仕する「手引き」「綱要」であり、聖書の深い唯一の意味を探究することであり、アウグスティヌスやカルヴァンが採用した名称であること、さらに、教理学とは個人の信仰の表明ではなく、教会の信条の学的積明である、と説明している。このことは、評者も同感であり、教会における教理の重要性は改革派神学の伝統であり、岡田が教理学としたことは意味深いことである。第三章の中で、特に改革派神学において今日では軽視され、片隅の付属問題扱いを受けている教理である「キリストとの結合」と「子にすること」を、岡田が論じていることに神学的業績がある。「キリストとの結合」は、ニーゼルが「改革派教会の中心的教理である」と述べているように、カルヴァンの救済論全体の中心的な教理であり、『ハイデルベルク教理問答』の主題である。また「子にすること」は、牧田吉和が「日本語

理』に特別な注目を払っている点で、岡田の立場はユニークな位置を占めている」と評価している。第四章は、岡田の教会論の論考であるが、非キリスト教的日本社会に生きる教会にとって、さらに信仰の私事化・内面化に対して、第三章の中に置かず第四章で別に取り上げていることは、著者の優れた神学的見識である。岡田のキリストの三職論からの教会権能と教会と国家の論考は、今日の教会において重要である。第五章は、岡田が植村正久、高倉徳太郎、熊野義孝の神学について論じているものを著者が纏めたものであるが、大変興味深く、一読すべき価値がある。さらに、岡田の日本宣教論について、旧新約聖書の統一性、すなわち、旧新約聖書を一貫した救済史としてとらえ、そこから日本伝道に着手すべきことを解説していることに共感するものである。

最後に、学生時代岡田稔の改革派神学にふれて以来、改革派神学を学んでいる一人として、『岡田稔の神学』が出版されたことは、大きな喜びであり感謝である。

(まつだ・しんじ) 日本キリスト教会神学校組織神学講師・日本キリスト教会蒲田御園教会牧師

(A5判・三三三頁・定価六一六〇円・一麦出版社)

# 歴史の丹念な掘り起しと 現代への貴重な示唆

〈評者〉 山口陽一

スペイン風邪が日本を襲ったのは、第一次世界大戦末期の一九一八年一〇月から翌年五月（第一波）、同年一月から一九二〇年五月まで（第二波）で、特に二〇年一月の東京では「地獄の三週間」と言われるほど猖獗を極めた。当時は流行性感冒（流感）と呼ばれ、全国で四五万人、台湾・朝鮮・樺太を加えると七十三万人、世界では五千万人が死亡したとされる。

本書は、これほどの被害にも拘らず、定評ある「日本キリスト教史年表」にも記述されずに忘れ去られた「パンデミックと日本の教会」についての共同研究の成果である。研究を提唱した戒能信生は、教会とキリスト教学校の生徒の死者は百名をはるかに超えると言いい、そこには中島力造、ヘンリー・ルーミスの名前もある。カトリック教会を調査した三好千春は、東京大司教区や当時の信者の四分の三を

的問いかけがある。再臨運動は、大戦を機にパンデミック前に始まるが、流行性感冒は運動にリアリティーを与えた。上中はこの時期の世界情勢分析にシオニズム運動を加え、究極の解決をめざす再臨運動に「地の塩」の役割を観る。戒能信生が読み解く内村鑑三、柏木義円、金井為一郎、高倉徳太郎の日記においては、柏木義円と高倉徳太郎の比較が興味深い。戒能は、今回の調査で最も深刻に考えさせられたのが高倉の日記であると言う。高倉は教会員や親友を失いながら、流行性感冒そのものには全く関心を寄せておらず、世界大戦への神学的な問いもない。一方、世界大戦とスペイン風邪の関連を捉え、大戦の経済への影響を洞察する柏木の炯眼に驚かされると言う。柏木の家族も罹患し、次男策平は急逝する。柏木は我が子が絶息する悲痛の中で



新編コノニア36  
100年前のパンデミック  
日本のキリスト教はスペイン風邪とどう向き合ったか  
富坂キリスト教センター編  
【著者】  
神田健次、戒能信生、梅光英、三好千春、李元重、辻直人、梅田成子、上中栄

100年前のパンデミック  
日本のキリスト教はスペイン風邪とどう向き合ったか  
富坂キリスト教センター編



占める長崎教区の史料がないとした上で、函館・大阪教区と札幌知牧区の記録を紹介する。パリ外国宣教会の宣教師九五人中三四人が召集されており、随所に世界大戦が影を落としている。李元重は、同志社所蔵の豊富な資料を用い、当時「新時局伝道宣言」を掲げて大戦後の伝道と社会改造に邁進していた日本組合基督教会において、スペイン風邪がまったく「課題」となっていないことを検証する。キリスト教学校担当の辻直人は、梅光女学院、北陸学院、東洋英和などを紹介し、感染症に恒常的に直面する時代にあつて、宣教師が教える家政学が、栄養や健康への関心を高めたことを論じている。日本幼稚園連盟（JKU）の年報を克明に調べた熊田凡子は、子どもへの衛生指導や医師による健康診断が地域社会を助けたとし、「母の会」の役割に注目する。上中栄の「スペイン風邪と再臨運動」には神学

十字架の贖いに感謝し、天父に信頼する子の心を天父が喜び給うことを知ったという。

巻頭には、共同研究の意義を語る神田健次の「まえがき」があり、巻末には三〇ページにわたる「各教派の機関紙等に見るスペイン風邪の記録」の貴重な一覧表がある。また感染症対策コンサルタントであり神学生でもある堀成美の五つのコラムは、さまざまな感染症の中で生命をかけて福音に生きた教会の歴史に学び、今日の教会に深く問いかけている。百年前「日常的」だった感染症の記憶は、関東大震災（一九二三年）など大事件の陰に隠れてしまったが、これを丹念に掘り起した本書は、類書がなく、新型コロナナ・パンデミックの時代に生きる私たちにとって不可欠無二の一冊である。（やまぐち・よういち 東京基督教大学学長

（A5判・一九一頁・定価一六五〇円・新教出版社）

## 東西2人の神父が コロナ禍の教会に贈る



晴佐久昌英  
片柳弘史 [著]

上智大学ソフィア会主催「Net de ASF」で「不安な時代をどう生きるか」をテーマに語った東西2人の神父による珠玉の対談に約3万字の書き下ろしを加えた現代へのメッセージ。



片柳弘史（かたやなぎひろし）  
1971年埼玉生まれ。慶應義塾大学法学部法律学科卒業。94～95年、インド・コルカタでボランティア活動に従事。マザー・テレサの勤めて神父になることを決意する。08年、東京・聖イグナチオ教会にて叙階。現在は山口県宇部市で教会の神父、幼稚園講師、刑務所教諭師などとして働く。

晴佐久昌英（はれさく・まさひで）  
1957年東京生まれ。上智大学神学部、東京カトリック神学院卒業。87年、司祭叙階。エッセイ集、詩集、絵本、日めくりカレンダー、説教集、信仰入門書等、著書多数。  
現在、カトリック上野教会・浅草教会主任司祭。「福音を説明する司祭ではなく、宣言する司祭」として、プロデスタント教会やお寺、大学などで講演する。

四六判・126頁・定価1,320円+税

キリスト新聞社 since 1946  
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
AVACOBビル6階 TEL. 03-5579-2432

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrikan_systen_0530@ghoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台青葉区1-36 穀穂センター・イマif	022-223-2736	共用		fcqwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新富2-2 千葉カリアセンタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vestia.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.avaco.info	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimbo.com/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.lighting.jp/~yokohamais/mbs.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunsha.la.coccan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-ine.or.jp/people/kyotan/	kyotan@mbox.kyoto-ine.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osekacds.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびるすの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7589	078-945-9388		kobex@nikkihan.co.jp	00170-2-421390
広聖堂文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一丁目1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.goties.jp/matsuyama_107/index.html	sksch@doki.doki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上富野5-2-18	093-967-0321	共用		kcbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

## ■日本キリスト教団出版局

### 我が国籍は天に在り 志の信仰に生きる

船戸良隆著

長年にわたって海外支援団体でアジアの貧困に取り組み、退職後は地方教会の牧会に携わる著者。その活動をつらぬくのは、神の国の福音に根ざした「我が国籍は天に在り」の信仰である。幾度も悔い改めに導かれ、十字架理解を深める著者が語る、渾身のメッセージ集。

四六判・152頁・定価1540円

### 日々のみことば 生きる力を得るために

服部 修著

岡山・蕃山町教会の牧師である著者が、フェイスブックで10年近く配信してきた日々の聖句と養いのショートメッセージから、366日分を精選して収録。その日選ばれた聖書の言葉と1分程度で読める短いメッセージが、1年を通して信徒に生きる力を与えている。

四六判・200頁・定価2420円

## ■教文館

### 読むよろこびは生きるよろこび (仮題)

斎藤惇夫著

編集者から児童文学作家となった著者が、キリスト教幼稚

## INFORMATION

### 近刊情報

園の園長に！ 本気になって園児たちと遊ぶ日常生活と祈りの詩、子どもと絵本・物語について語った連載をまとめる初のエッセイ集。子どもと本に関わる方々へ、〈本好きの子どもを育てるためのコツ〉を惜しみなく伝授します。

四六判・260頁・定価1650円

## ■新教出版社

### コロナの時代に聖書を読む【仮題】

奥田知志著

2020年のイースター礼拝から始まった「コロナの時代に聖書を読む」連続説教。「ユダヤ、帰れ」をはじめYouTubeで配信され大きな反響を呼んだ15回の説教を収録。人々の間を分断する大きな壁に、福音の言葉が穴を穿つ。新たな気づきに満ちた、胸躍る聖書の読み方。

四六判・260頁・予価1980円

### アナキズムとキリスト教

ジャック・エリユール著

新教出版社編集部訳

キリスト教信仰の立場から鋭利な技術社会批判を行った著者の、晩年の最重要著作。「人間性を擁護する唯一にして最後の防衛手段としてアナキズムを肯定することが必要だ」と主張する。国家を自明視する主流派キリスト教へのラディカルな問題提起。

四六判・208頁・予価2750円

全国のキリスト教書店員が選んだいちばん読んでほしい本

# キリスト教書店大賞2021

主催 キリスト教出版販売協会

2020年1月～12月に出版されたキリスト教書の中から、  
全国のキリスト教書店員の投票により大賞が決定!



## やさしさの贈り物

日々へ寄り添う言葉 366

片柳弘史 著

定価990円 教文館



### オススメ

仙台キリスト教書店 永野香織さん  
読みやすく、価格も手頃のため、自分で読むことにも良いし、プレゼントにもふさわしい1冊です。

### 受賞のことは

片柳弘史



『こころの深呼吸』に続いての大賞、ありがとうございます。精いっぱいやさしさを、短い言葉に込めて皆さんにお届けする。それが、わたしに与えられた役割なのかもしれません。少しでもお役に立てれば幸いです。

### 第2位

## だから私は、神を信じる

加藤一二三 著

定価1,320円 日本キリスト教団出版局

### オススメ

松山キリスト教書店 平岡光司さん

テレビ出演が多い著者。ある日民放の番組で讃美歌を歌っていた。熱心なクリスチャンとは知らなかった。人柄も良く、今著は、自らの信仰について深く語られている良書です。

### 第3位

## やばいぜ! 聖書

あなたに贈る40のメッセージ  
明治学院テキスト作成委員会 編  
定価1,100円 新教出版社

### オススメ

バイブルハウス南青山 加藤太郎さん

明治学院テキスト作成委員会による旧約聖書と新約聖書から20のメッセージと、各ページにアクティブラーニングがあり、個人やグループでの学びに最適です。

### 第4位

ひと時の黙想  
主と歩む365日  
マックス・ルケード 著  
日本聖書協会 訳

定価1,980円  
日本聖書協会

### 第5位

悲しみよありがとう  
まはたきの詩人 兄・水野源三の贈り物  
林 久子 文  
水野源三 詩  
小林 恵 写真  
定価1,320円  
日本キリスト教団出版局

### 第6位

誰にも言わないと  
言ったけれど  
黒人神学と私  
ジェームズ・H. コーン 著  
榎本 空 訳  
定価3,300円  
新教出版社



価格は10%税込

### 第7位

希望する力  
コロナ時代を生きる  
あなたへ  
晴佐久昌英・  
片柳弘史 著  
定価1,320円  
キリスト新聞社

### 第8位

ナウエン・セレクション  
アダム 神の愛する子  
ヘンリ・ナウエン 著  
宮本 憲 訳  
塩谷直也 解説  
定価2,200円  
日本キリスト教団出版局

### 第9位

人生に悩んだから  
「聖書」に相談してみた  
MARO  
(上馬キリスト教会ツイッター) 著  
定価1,540円  
KADOKAWA

### 第10位

クリスマス  
カール・バルト 著  
宇野 元 訳  
定価1,540円  
新教出版社

『本のひろば』のバックナンバーをWeb上で閲覧できます。「キリスト教文書センター」のホームページから「書評誌『本のひろば』」にアクセスしてください。

<http://www.bunsyoyo.or.jp>

### 2020年12月号

書名	著・訳・監修者、出版社	書評者
巻頭エッセイ: 贖罪としての『キャッチャー・イン・ザ・ライ』	唐澤健太	
対談: 『日本キリスト教歴史人名事典』 鈴木範久/山口陽一/戒能信生/小檜山ルイ/釘宮明美		
特集: 特集カトリック信仰を知るにはこの三冊!	原 敬子	
NTJ新約聖書注解 第1、第2、第3ヨハネ書簡	三浦 望著、日本キリスト教団出版局	佐藤 研
ルカ福音書を読もう上	及川 信著、日本キリスト教団出版局	小島 仰太
信仰生活ガイド 使徒信条	古賀 博編、日本キリスト教団出版局	大久保正 禎
加藤常昭説教全集 34 エフェソの信徒への手紙	加藤常昭著、教文館	本城 仰太
必ず道は開かれる	越前喜六著、日本キリスト教団出版局	木村 恵子
小西芳之助の生涯	山口周三著、教文館	北原 和夫
天からはしご 創世記・下	大頭真一著、ヨベル	中村 佐知
「わたし」があなたを使いたい ヨナ書講解	キム・ナムグク著、ヨベル	権 ヨセフ
希望する力	晴佐久昌英他著、キリスト新聞社	香山 リカ
クリスマスへの旅路	越川弘英編、キリスト新聞社	古賀 博

### 2021年1月号

巻頭エッセイ: 絵本『こいぬのうんち』と権正生	きどりのこ	
特集キリスト教における死を考えるにはこの三冊!	江口再起	
現代キリスト教教育学研究	朴 憲郁著、日本キリスト教団出版局	吉岡 良昌
わたしたちはどんな医療が欲しいのか?	M. デ・リッター著、教文館	鹿島 友義
押田成人著作選集 2 世界の神秘伝承との交わり	宮本久雄他編、日本キリスト教団出版局	石原 明子
ひと時の黙想 主と歩む 365 日	マックス・ルケード著、日本聖書協会	大田 裕作
苦しみと悪を神学する	M. S. M. スコット著、教文館	芳賀 力
P・T・フォーサイス 聖なる父	川上直哉訳著、ヨベル	小嶋 崇
イエスから初期キリスト教へ	日本新約学会編、リトン	石橋 誠一
神曲つれづれ	住谷 眞著、一麦出版社	春日 いづみ

キリスト教書店大賞 <https://www.facebook.com/christianbookoftheyear/>  
フェイスブックページ

「いいね!」をクリックして最新情報をGET! QRコードで簡単アクセス! →



# 福音と世界

2021年9月号

特集 技術との対話

寄稿者 安田智博、中村徳仁、小泉空

水島希、入江公康、児玉真美

新連載 アジアの草の根 平和の証し人 一歩、  
また一歩 (宇井志緒利) / 好評連載 霊性のエ  
コロジ (村澤真保色) / I Say a Little Prayer  
開かれる世界 (栗田隆子)、福音のフラグメン  
ト (有住航)、古代イשראל文学史序説 (勝  
村弘也)、新約釈義第二メモテ書 (辻学) ほか

A5判・定価660円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyō-pb.com

## 編集室から

福音書で主イエスは「子どもたちを私のところに來させなさい」と言ってお招かれた。なぜ主は、子どもたちを愛されたのだろうと思いがら、遊びまわる四歳の一人娘を私は見つめている。

娘はまだ幼くても、広々とした心を持っている。教会付属の保育園に遅くまで残っていた日の帰り際、会堂に立つ十字架を見上げてこう言った。「神さまってすごいものだねー。みんなのために十字架にかかったんだねー、感動した!」。神の救いをめいばいに心に受け入れる、そんなさわやかな信仰の発言を聞いて、「神の国はこのような者たちのものである」という御言葉が、よくわかるように思った。その素直さに比べて私の信仰は、毎日さまざまな心配事に

## 予告

本のひろば

2021年10月号

本・批評と紹介

(巻頭エッセイ)「本との出会いを通しての奇跡」  
鳥居雅志、(書評)小川 修著『小川修パウロ  
書簡講義録7 ガラテヤ書講義I』、大頭眞一著  
『聖なる神の聖なる民 レビ記』、深沢美恵子編著  
『花子とアン 村岡花子の甲府時代』、加藤常昭著  
『加藤常昭説教全集33 コリントの信徒への手紙  
二講話』、ジョン・ヒック著『宗教と理性をめぐる対話』他

どんなに押し潰されがちで、窮屈になっていることか。

創世記一七章一節で、神はアブラムに「わたしに従って歩み、全き者となりなさい」(新共同訳)と言われた。この「わたしに従って歩み」は原文では「私の顔の前を歩みなさい」なのだ、昔、神学校の旧約の授業で教えていただいたことを、ふと思い出した。確かに、聖書協会共同訳ではこの部分は、「私の前に歩み、全き者でありなさい」に変わっている。

神の前に歩む——神の視界の中で生きるということならば、子どもも大人も変わらないのではないかと思った。年を重ねても、時に擦り切れたような自分の信仰を情けなく思うとしても、キリスト者は皆、罪赦された神の子どもたちなのだから。子どものように、御顔の前で遊びまわろうにほがらかに、日々を過ごしたいと願う。(石澤)

# 天国なんてどこにもないよ

それでもキリストと生きる

関野和寛 著

苦しみをすべて、イエスに向かってぶつける！

コロナ禍の米国で病院チャプレンを務める異彩の牧師、初の説教集！



目の前に広がる絶望に満ちた現実世界。暴力、差別、災害、孤独、パンデミック。理不尽に苦しむ人々に自分は何ができるのか？ 孤独と闘い、イエスにぶつかり続けた牧師が、矛盾だらけの聖書に食らいつき、絞り出した魂の叫び！

● 四六判変形・並製・220頁・定価1,650円

# 加藤常昭説教全集 37 旧約聖書・福音書の説教

第IV期最終配本

加藤常昭 著



隠退後に、全国の教会で語った説教を収録。貴重な旧約聖書の説教や伝道説教も含まれている。

● 四六判・上製・448頁・定価4,180円

## 『加藤常昭説教全集』

全37巻が、ついに完結！

第I期 福音書講解説教全16巻  
第II期 書簡・黙示録講解説教全9巻  
第III期 説教・講話全5巻  
第IV期 若い時と隠退後の説教とFEBCでの聖書講話全7巻



加藤常昭牧師が20年にわたって鎌倉雪ノ下教会で語った講解説教の集大成。2004年に刊行を始め、巻構成は、一つの巻にヨルダン社版と同じ区分の内容が入るよう配慮。また字句・文章を見直し、新たに版を組み直した。ヨハネの手紙一および、第III期・第IV期は新収録。





# 遺跡が語る聖書の世界

長谷川修一著 (はせがわ氏は立教大学教授)

聖書の世界の人々はどんな家に住み、何を着て、いかなる食生活を送っていたのか？ 貨幣や暦は？ 戦争ではどんな武器を使っていたのか？ 聖書考古学の第一人者が、興味尽きないテーマを平易に解説。

8月26日

# 目はかすまず気力は失せず

関田寛雄著 講演・論考・説教

7月26日

モーセのごとく使命に生きる信仰——。常に社会の中で低くされてきた人々と共に歩み続けた著者の、40余年の間に語られた47編の講演・論考・説教を収録。93歳になる著者を現役の牧会者・説教者・神学者として生かされる福音の核心を伝える。

◆四六判・定価2200円



# 100年前のパンデミック

話題!

日本のキリスト教はスペイン風邪とどう向き合ったか  
富坂キリスト教センター編



各教派や学校の機関紙誌、教界指導者の日記を読み込み、当時のキリスト者がスペイン風邪をどう捉え、いかなる取り組みをしていたのかを探る。歴史の空白を埋める共同研究。

◆A5判・定価1650円

# 組織神学 第三卷

終末論的な賜物としての霊に関する教理のもとで展開される浩瀚な教会論。「霊の注ぎ、神の国、そして教会」、「メシアの教団と個人」、「選びと歴史」、「第15章 神の国における創造の完成」。

第一巻は既刊。第二巻は翻訳進行中。

◆A5判・定価13200円

ヴォルフハルト・パネンベルク著  
佐々木勝彦訳

# テモテ・テトス・ファイルモン書

カルヴァン新約聖書註解 12 / 堀江知己訳 7月26日

牧会書簡およびファイルモン書の4つの註解を収める。長老や監督など初代教会の職制に関する読み解きは驚くほど自由で興味深い。愛書家のため函入上製本を限定100部制作。専門書店にご注文下さい。

◆A5判・並製・定価4730円 / ◆上製函入・定価6380円

カルヴァン  
新約聖書註解  
テモテ・テトス・ファイルモン書  
堀江知己訳



新教出版社